

令和8年度 京都府立向陽高等学校 学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(計画段階)

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題
教育推進部	「動機・意欲主義」に基づく授業改善の仕組みの構築	授業スタンダードを土台とし、「動機・意欲主義」にこだわった研究授業を2学期に実施する。全教員が参加する形式とし、教育推進部が事前・事後の教科横断的研修会を設計・運営することで、生徒の「解きたい・書きたい・やってみよう」を引き出す授業実践を学校全体で蓄積・共有する仕組みを構築する。		
	生徒の挑戦を称え、アントレプレナーシップ文化を根付かせる土台の形成	令和9年度入学生教育課程の編成において、アントレプレナーシップを本校の「顔」として明確に位置づける。新学習指導要領の論点整理を念頭に、挑戦を促し成長を支える学びを教育課程上に反映させることで、文化醸成の土台を形成する。		
生徒指導	生徒会を中心に生徒一人一人の主体性を育み、学校行事をさらに深化させる。	行事の企画内容について生徒会と定期的に打合せを行い共有し、可視化できるようにする。生徒会と教職員が共通理解をもって行事を運営する。さらに、生徒の意見を集約し、学校行事に生徒の声が反映される仕組みを構築することで、学校行事のさらなる深化を図る。		
	向陽高校の文化祭が、地域のプラットフォームとなり、「地域に開かれた学校」として向陽高校の魅力の発信につなげる。	文化祭をより多くの方々に来場してもらうため、土曜日開催も行い、生徒の自由な発想による多彩な企画を実施し、年齢を問わず幅広い来場者が楽しめる文化祭を目指す。こうした取組を通して、地域の方々に向陽高校の良さや魅力を知ってもらう。		
進路指導	関大大学志望生徒の進路希望を実現するとともに、教員の進路指導力の強化を図る。	昨年度立ち上げた勝ちゼミについて、週1回授業時間内に作戦会議を実施するなど教員体制を強化する。より組織的に生徒の実力向上を図るとともに、安心して長期間にわたる受験勉強に向かうことができるよう心理面のサポートを行う。		
	パイロット協定を結んでいる関西大学を目指す生徒を増やす。	関大プロジェクトを立ち上げ、関大パイロット接続制度を有効活用する。1年生全員参加の関大見学会や入試説明会の校内実施、教員の過去問研究による入試対策などを行う。		
保健部	支援体制の構築	生徒が健やかな学校生活を送ることができるよう、各学年・分掌・関係機関と連携し支援のための方策を検討・実施していく体制を充実させる。個々の生徒の抱える問題に丁寧に対応するために、定例開催ではなく臨機応変に会議を設定するとともに、その報告を全教職員に即時に伝えるようにしていく。		
		外部関係機関とも昨年度以上に連携しながら、教員研修として、オンデマンドを含めた研修会を各学期に計画し、教育相談や特別支援教育に関する理解を深める機会を増やす。		
図書部	読書バリアフリーの促進	利用しやすい形式の資料や、読書を支えるための道具を配備し、それらについて「知る」「体験する」機会を提供する。図書館を利用するすべての人が自分に合った読書スタイルを発見できるような環境を整え、生涯学習を支援する。		
	地域に開かれた図書館づくり	昨年度試行した京都府立図書館と共同の取組(製本技術を活用したワークショップ)を、今年度は文化祭で実施する。図書委員が主催し、地域の人々にも参加してもらうことで、本を通して様々な人々が交流する場として地域に開かれた図書館づくりを目指す。		
第1学年部	生徒が「学校に来たい」と思える学年づくり	入学後早期に面談を行い、対話を重視することで、生徒のつまずきや不安を見逃さない。また、教科担当者・学年・分掌との間で情報を共有し、早期に問題を発見・組織的課題解決ができ、安心して学校生活を送ることができるよう環境を整備する。 生徒の「やってみよう」を一緒に模索し、すべての教育活動において結果ではなく、そのプロセスを大切に、「試行錯誤」を称賞・評価・支援し、失敗を歓迎する文化の醸成を行う。これにより、1年生のうちから失敗を恐れず挑戦する「主体的な学習者」の姿勢を確立する。		
第2学年部	生徒自身に挑戦経験を積み、「新しい自分」の発見や「自分をもってできる」という自己効力感を育てる。	研修旅行をはじめとする各種行事(団体鑑賞・遠足・向陽祭他)を中心に、生徒自身が自ら考え企画し挑戦する機会を設ける。上記の各種行事の中で、生徒一人一人に様々な活躍の場を準備し、新しい自分の発見と自己効力感の醸成を支援する。特に研修旅行に向けて班決めや自由時間のプランニングを自分たちで取り組むことで、重点目標の達成を図る。		
第3学年部	一人ひとりが希望する進路実現とその後の人生設計	小まめに面談等を行い、生徒の希望する進路について寄り添いながら考え、その実現に向けて、生徒が主体的に動ける環境を整えていく。また、その実現の支援を行う。 学校行事、特に文化祭に向けて、最終学年として主体的に計画から実践に動いていけるよう支援を行う。		
広報担当	広報媒体を研究し、費用対効果の高い広報活動を実現する	学校HP・公式SNS・紙媒体(学校案内等)の役割を明確にし、更新頻度や内容を見直すことで、人的・時間的コストを抑えつつ説明会申し込みを前年度+20%をめざす。		
		HPアクセス数、SNS閲覧数の定点観測、説明会参加者のアンケート等の簡易分析を行い、継続的な改善を行う。		
探究教育担当	動機・意欲に根ざした探究活動による挑戦機会を創出し、新たな価値創造を推進する。	自己理解から出発し、興味関心を広げ、地域探究やフィールドワーク、探究手法の修得を経て探究の基礎を体験的に身につける。多様なアウトプットとポートフォリオを用いて振り返り、次年度のテーマ設定へ接続する。		
		各ラゴのプログラムに基づく探究を深化させ、外部との連携や実践活動を通して挑戦を促進する。また、成果を発信することで、社会に向けた価値創造へとつなげる。		
事務部	計画的な予算執行及び見える化に取り組む。	探究活動及び広報活動において、各活動に係る協議を早期に行うため、事務部内にも担当を設置し、教育活動に対して教員との連携強化を図る。 予算執行において、各教育活動の趣旨を踏まえ、優先順位の整理を行う等、活かした予算活用を意識し、高い効果が得られるような提案を行う等、教育活動へ積極的に参画する。		
学校関係者評価委員会による評価				
次年度に向けた改善の方向性				

令和8年度 京都府立向陽高等学校 学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(計画段階)

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題
国語科	知的好奇心を喚起する発問や授業内容の工夫	ICTを活用しながら、生徒が自然に「考える」発問や、興味をかき立てられるような投げかけを行う。		
	「主体的な学習者」を育む授業改革	表現する力や主体的に授業に取り組む姿勢を身に付ける指導を推進するため、要約文の作成や意見発表、グループ協議の機会を各学期で設定する。		
地歴公民科	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善	対面的なペアワークやグループワークのみにとどまらず、ICTなども積極的に活用し、生徒がアウトプットする機会を設ける。		
		教員間については、過去の教材やノウハウの共有、相互の授業見学などを通して、継続的に授業改善に努め、生徒が主体的に学ぶ授業を展開する。		
	評価と指導の一体化の精度向上	基礎的な知識および技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力やその他の能力を育み、主体的に学習に取り組む態度を養えるように工夫する。また評価方法を生徒に明記することで、生徒が学びなどを振り返り、自身の学習を調整できるようにする。		
数学科	探究活動や主体的に数学に向かっていくために必要な基礎基本の部分の定着を図る。	定義や定理をただ紹介して終わるのではなく、既習事項からのつながり等を意識した授業づくりを行う。また、小テストや机間巡視を適宜実施し、理解できていない生徒や困っている生徒への対応を図る。		
	探究心を持つような刺激を授業の中で扱っていく	単元にまつわる、教科書には記されていない内容や簡単に紹介だけされている内容を授業の中に盛り込む。		
理科	協同授業を通じた授業改善	グループで観察・実験を通して科学的思考力を育てるとともに、他者との意見交流から問題解決を図るなどの活動を通して理解を深めるような授業を展開する。		
保健体育科	生涯スポーツを見据えた運動・スポーツ活動の充実	運動やスポーツが心身の充実に果たす役割として、また運動やスポーツを「する、みる、支える、知る」などの多様な楽しみ方の視点から捉え、自他の豊かな生活や活気ある社会づくりにつながるものとなるよう授業展開を再考する。		
	運動と健康を結び付けた生涯にわたる健康意識の育成	保健に関する課題や情報を、健康や安全に関する概念やそれに基づく原則に着目して捉え、リスクの軽減や生活の質の向上、及び健康・安全を支える環境づくりにつなげることができるよう、ICTを活用した実践的な授業展開を考察する。		

令和8年度 京都府立向陽高等学校 学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(計画段階)

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題
芸術科	芸術教育の創造的学びの発信	オープン文化祭や合同発表会などにおいて、音楽(重奏・連弾等演奏活動)、美術(作品制作)、書道(作品制作・書道パフォーマンス)の前半期学習内容を合同展示発表する。練習・制作の過程において生徒の企画力・表現力・協働性を育み、動画を併用した展示物を来場者と共有することで鑑賞能力を高め、芸術教育の発信につなげる。		
英語科	基礎の定着と活用を通じた言語活動の充実	基礎的な語彙・文法・読解等の内容について段階的かつ計画的に指導し、定着を図る。		
		各単元において「理解(インプット)→思考→表現(アウトプット)→フィードバック」の学習過程を意識した授業を設計する。		
	主体的に学び続ける力の育成	振り返り活動を通して、生徒が自らの学習過程を見直す機会を継続的に設定する。		
		目標設定や自己評価を取り入れ、生徒が主体的に学習に取り組む態度の育成を図る。		
家庭科	「できる」と実感・自信が持てる授業の工夫	調理実習・被服実習・作品作りなどを効果的に取り入れ、主体的に取り組む達成感を感じられる授業を実施する。		
		プレゼンテーションやグループ学習を通じて、互いに認め合い意欲に繋がる授業を工夫する。		
情報科	クラウド活用による実践力育成	成果物をクラウド上に公開し、他者からの評価を踏まえて改善する実践的な学習活動を行う。		
	AI活用による創造的表現力育成	生成AIを用いて画像・文章・構成案を作成し、それらを組み合わせたコンテンツ制作を行い、表現力と発信力の向上を図る。		